

リーディング・ストラテジーの活性化と長文読解におけるその効果

The activation of reading strategy and its effect on reading comprehension

石原 果奈

Kana Ishihara

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：英語，長文読解，リーディング・ストラテジー

Key words : English, Reading Comprehension, Reading strategy

1. 研究目的

ストーリー・リテリングと長文読解の関連性を研究した際、リテリング課題を与えることによってリーディング・ストラテジー(以下 RS)の使用度は上昇したにもかかわらず長文読解は向上しなかった。このことから、RS と長文読解の間には複雑なメカニズムが存在することがうかがえた。

RS と長文読解についての先行研究では、鈴木・森永(2010)、山下・横山(2004)、足立・大石(2017)など、ストラテジーのレパートリーの広さとその RS 使用度を尋ねる質問紙を用いてストラテジーと長文読解の相関を究明しようとするものが多く、RS 指導の効果に関する研究は不足している。今回の研究では、指導による RS 使用意識の向上とそれによる長文読解の向上を明らかにする。

2. 研究実施内容

主に私立大学英文学科・社会情報学部に所属する大学2年生72名を対象とし、実験群36名、統制群36名の2群に分けた。さらに、両群それぞれを読解力上位群と下位群に分けた。実験で用いる長文は、大学センター試験長文問題を使用した。実験で用いる RS は以下の5つである。

①「未知語推測」、②「代名詞の理解」、③「接続詞の活用」、④「トピック把握」、⑤「メインアイデア把握」。これらの5つは、先行研究の(卯城・清水;2007)の一部から引用している。読解問題においては5つのRSに対応した設問となっている。

実験では、まず RS 使用意識を尋ねるための事前アンケート、実験で用いる英単語の知識の有無を確認するための単語確認テスト、20分間

で長文を読んで設問に解答する事前テストを行う。その後、RS 指導を行い、20分間で長文を読んで設問に解答する事後テスト、事前アンケートと同様の事後アンケートを行う。なお、事前・事後テストは、難易度は等しいが異なる長文問題を使用する。

RS 指導としては、指導するストラテジーの説明、例題を用いたストラテジー使用方法の実演、練習問題を用いたストラテジー練習を行う。教材は、「Making Connections①, ②」(Pakenham et al., 2013; Cambridge 社)を用いる。

RS 指導によるストラテジー使用意識の向上について分散分析を行った結果、実験群下位群の使用意識は高まった(表1)。上位群は以前からRSを使用していた被験者が多く、天井効果によりそれ以上向上しなかったと考えられる。下位群は、指導前のストラテジー使用意識は上位群よりも低かったが、指導後は上位群よりも向上し、下位群にのみ有意差が表れた。

要因	F 値	P 値
指導	F(1, 34)=10.73	p<.002
習熟度	F(1, 34)=.198	p=.659
指導*習熟度	F(1, 34)=4.34	p<.045

表1. 実験群の分散分析結果 (RS 使用意識)

RS 使用意識の向上による長文読解の向上について分散分析を行った結果、RS 指導を行うことによって下位群の長文読解が向上した(表2)。上位群は RS 指導を行う前からストラテジー使用意識が高く、事前テストの得点は下位群に比べ3.78点高かった。したがって、事前・事後テストとの間に有意差が表れなかったと考えられる。また、事後アンケートは、上位群は既に

確立した自分の読み方に RS 指導によって与えられた知識が干渉し、指導が長文読解の妨げになってしまった可能性を示唆する。それに対し、下位群は指導前のストラテジー使用意識は上位群に比べて低かったため、指導を通して上位群が指導前から知っていたストラテジー知識を得ることによって上位群との読解テストの得点差を縮めることができた。

要因	F 値	P 値
指導	F(1, 34)=5. 83,	p<. 021
習熟度	F(1, 34)=33. 59	p<. 01
指導*習熟度	F(1, 34)=29. 22	p<. 01

表 2. 実験群の分散分析結果 (長文読解)

RS と長文読解の因果関係を検討した。ストラテジー使用意識と長文読解の相関は実験群上位群では指導前より強い相関が表れた[r=0. 43, r=0. 70]。一方で、下位群では、指導前と後の双方において相関はほとんど見られなかったことから[r=-0. 11, r=-0. 16]、下位群のストラテジー使用意識の向上が長文読解の向上につながったとは言えない。下位群の場合、自己評価する際に自身のストラテジー使用を客観視できないために正当ができない可能性がある。しかし、上位群では、指導前後でストラテジー使用意識と長文読解に中程度と強い相関があった。これは、上位群においては自身を適切に評価することができ、ストラテジー使用の自己評価の信頼性が高いことを示唆している。

さらに、各ストラテジーの事前・事後テストの得点を見ると、ストラテジー「代名詞の理解」と対応した設問の得点が実験群下位群は上昇したのに対し、上位群は下降した。本研究ではストラテジー「代名詞の理解」の指導の際に代名詞が指し示しているものをその前後 2, 3 文あたりを読んで探すようエリア指定した。これにより、本来、文章全体を把握したうえで文脈を理解し代名詞が何を指すのかを特定するはずである行為が、2, 3 文と限定された中から探す行為に変わってしまったことが要因として考えられる。

3. まとめと今後の課題

RS の知識の有無は、長文読解に大きな差を生むことが明らかになった。指導前からストラテジーを知っていたと事後アンケートで回答していた上位群は、ストラテジー使用意識は変わらず、長文読解は下降した。これは、天井効果と

以前より持っていた RS に指導が干渉したことが原因だった。それに対して、事後アンケートで指導前には RS を知らなかったと回答した下位群は、ストラテジー使用意識が上昇し、長文読解も向上した。つまり、RS 指導を行う前からストラテジーを活用し自身の読み方を確立していた上位群よりも、指導前にはストラテジーを知らなかった下位群に RS 指導は効果を及ぼした。このことから、長文を読む際の基礎知識として RS 指導を授業で取り上げることは、長文読解力の向上につながると考える。RS 指導を体系的かつ継続的に行うことにより、リーディング能力も向上すると考える。

なお、本研究では RS 指導は下位群のみに効果があったが、今回の実験は 1 回のみ指導結果であるため、知識とその応用の浸透が不十分だった可能性がある。RS 指導を継続的に行って長文読解の向上を観察することが今後の課題である。

また、実験群上位群の長文読解が下降した。この大きな要因として、「代名詞の理解」に対応した問題の平均点が下降したことが挙げられた。さらに、平均点が下降した要因としては、「代名詞の理解」の指導の仕方を先に述べた。つまり、ストラテジー指導において誤解を招く教え方をすると長文読解を下げる危険性があることが示唆された。したがって、ストラテジー指導においては学習者の既存の知識にも考慮して、綿密な計画を立てて行う必要がある。

4. この助成による発表論文等

①学会発表

[1]大妻女子大学

言語文化学専攻内の学術論文発表会
石原果奈 リーディング・ストラテジーの活性化と長文読解におけるその効果 2019/02/07

[2]大妻女子大学

人間文化研究科内の学術論文発表会
石原果奈 リーディング・ストラテジーの活性化と長文読解におけるその効果 2019/02/23

②図書

[1]大妻レビュー (発行予定)

石原果奈 リーディング・ストラテジーの活性化と長文読解におけるその効果